

異文化理解の在り方について

前在ロシア日本国大使館附属モスクワ日本人学校 教頭
奈良県奈良市立西大寺北小学校 校長 神谷 佳宏

キーワード：在外教育施設、モスクワ、異文化理解、グローバル人材、日本人としてのアイデンティティ

1. はじめに

東ヨーロッパ平原の中部に位置するモスクワは、ロシア連邦の首都で人口1150万人とヨーロッパで最も人口の多い大都市である。西洋と東洋の文化が融合し、ロシアの中心地として発展してきたモスクワは平成29年今年、市設立870年を迎えた。亜寒帯湿潤気候に属し、比較的湿度が高く暖かな夏は短く、湿度が低く寒い冬が長く続くのが特徴で、厳冬期には気温がマイナス25度前後まで下がり、市内を流れるモスクワ川も凍りつく。モスクワ市内には、世界遺産のクレムリンと赤の広場、ノヴォデヴィチ修道院、コロームンスコエには木造建築の教会がある。モスクワは、中央にあるクレムリンから同心円状に広がっている町であり、クレムリンからはすべての方向に放射状に幹線道路が延び、その幹線道路をつなぐ3つの環状道路がある。

また、ポリショイ劇場をはじめ多くの劇場やコンサートホールがあり、気軽に本場の華麗なバレエや音楽に触れられる芸術の街でもある。

2. 現地の教育環境

ロシアの義務教育は初等4年、中等5年の9年間で、新学期は9月から始まり4学期制である。学校には固有の名前がなく番号で呼ばれている。9年生は国家試験を受けることが義務付けられており、合格しないと卒業できない。合格すれば2年間の高等教育を受けることができる。さらに大学へ進学する為には11年生で国家試験を受け、その成績によって進学できる大学が決まる。授業料は高校まではほとんど無料である。教科書は、ソ連時代は無料配布であったが、最近は書店で買う（有料）というのが一般的である。

カリキュラムは日本とさほど変わらないが、中にはチェスやレゴといった教科を履修する学校もあり、専用の教室を備えている。

また、最近では小学校から英語を必修科目としている学校が増え、中には第二外国語として日本語を選択できる学校もある。ロシアの子どもたちは学校を自由に変えることができるため、自分に1番合った学校を探し、何度も転校する子も少なくない。

外国人がロシアの現地校に編入学することは少なく、日本人の子女は、インターナショナルスクールで学ぶ子どもたちもいるが、多くは日本人学校に通っている。

3. モスクワ日本人学校について

(1) 創立50周年を迎えて

本校は、1967年に「在ロシア日本国大使館附属モスクワ日本人学校」として創設されたヨーロッパ最初の日本人学校である。児童生徒数は開校時16名、創立50周年を迎えた現在は121名である。日本人学校に通う児童生徒の中には、海外での生活が長く日本の学校に通ったことがない子どもや、日常生活がロシア語中心のために日本語の習得が十分でない子どもが1割程度在籍している。

本校と同じ校舎にはスウェーデン人学校、フィンランド人学校、イタリア人学校が同居しており、体育館、グラウンド、スケートリンクは4校が時間を割り振って使用している。4か国対抗のサッカー大会や陸上大会を毎年行っている。また、昼休みには他の学校の子どもたちと一緒にサッカーをするなど日常的に交流が行われている。

る。文化交流では、スウェーデン人学校から毎年ルチア祭への招待を受け6年生が参加している。

教員も同居校の授業をお互いに参観し、それぞれの国の教育事情を学ぶとともに良いところはお互いに取り入れるなど職員研修、職員交流の場となっている。

(2) 学校運営について

創立50周年を機に「日本人学校規則」、「保護者会規則」、「スクールバス運行の手引き」の見直しと改定を行った。

①日本人学校規則

本校では大使館、ジャパクラブ、保護者、学校の代表によって構成された学校運営委員会が基本理念や学校運営方針を示した「日本人学校規則」を定め、本校の目指すべき姿を明確にしている。学校運営委員長はジャパクラブ教育担当理事が務める。

②保護者会規則

これまで保護者会として学校運営を支えてきていた組織をPTAとして改編し、教員と保護者が協働して教育活動を行う事ができるよう規則を改定した。

③スクールバス運行の手引き

治安上の問題から約85%の児童生徒は登下校にスクールバスを利用している。これまでスクールバスの運行はバスを利用する児童生徒の保護者代表によって組織されたバス委員会に委ねられていた。ロシアの道路交通法は目まぐるしく変わる事、バスの購入及び修理、ドライバーの雇用、安全なバスルートの確保等、その業務は多岐にわたり、バス委員長の負担は想像を絶するものとなっていたため、スクールバスの運行業務を外部委託に変更した。

4. グローバル人材の育成

(1) グローバル人材とは

日本政府は2013年6月14日の閣議決定でグローバル人材を「日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて様々な分野で活躍できる人材」と定義した。学校教育においてこの定義を具現化しグローバル人材としての基盤を育むため、身につけさせたい力を以下の3点に整理した。

I：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

II：語学力・コミュニケーション能力

III：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

まず、IIについては在外教育施設で学ぶ子どもたちは保護者が海外で仕事をしていることもあり、語学習得に関する意識が高く、コミュニケーション能力も一定のレベルに達している。むしろ、コミュニケーション能力を生かすために、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等を身に付けさせることが重要となる。

次にIIIはグローバル人材の育成に限らず、すべての子どもたちが人生を豊かに生きていく上で、重要な資質であるため学校行事や道徳をはじめ、すべての教育活動を通して身に付けさせることが肝要である。私は、グローバル人材を育成するために在外教育施設で学ぶ子どもたちへの指導で最も注力すべきことは、Iではないかと考える。

(2) 日本人としてのアイデンティティ

先述したように、海外での生活が長く日本の学校に通ったことがない子どもや、日常生活がロシア語中心のために日本語の習得が十分でない子どもにとっては、グローバル人材育成の前提となる日本人としてのアイデン

ティティや日本の文化に対する深い理解が不足しているように思われた。また、「日本人としてのアイデンティティとは何か」ということが指導者たちの中でどれくらい共通理解されているかという問題もある。一般的に日本人の良さとして紹介されるのは、「勤勉さ」、「真面目さ」、「礼儀正しさ」、「技術力の高さ」、「マナーやルールを守る規範意識」のようなものだろう。これらは当然ながら一朝一夕で築かれたものではなく、文化や宗教、歴史と密接に関係しており、日本人の「礼儀正しさ」や「勤勉さ」は、仏教や禅の思想によるところが大きいと思われる。これは日本だけに限った話ではなく、それぞれの国で宗教や歴史を通して培われた考え方・哲学が習慣として生活の中に深く根付き、アイデンティティを形成している。したがって、日本人としてのアイデンティティを正しく理解するためには、日本の文化を他の文化と比較して、何が同じで何が違うのかを浮き彫りにすることが重要である。すなわち、日本の文化を異文化と比較することで自国の文化をより深く理解でき、そのことを通して、初めて異文化を理解できるのではないかと考える。

5. 本校の取り組み

(1) 異文化理解

異文化理解教育、国際理解教育では、よく「多様性」という言葉が使われる。企業等では更に踏み込んだダイバーシティ（多様性対応力）が求められるという。学校と企業では求められるものは異なるが、文化や価値観に「優劣」をつけるのではなく、「違い」として尊重することが重要であると考えられることは共通している。しかし、この「違い」を「多様性」という言葉に置き換え、異なる文化を受け入れるだけでは本当に異文化を理解し、尊重しているとは言えない。在外教育施設においては現地校との交流活動が頻繁に行われているが、単に多様性を受け入れる活動に留まっている事例も散見される。

(2) 副読本「わたしたちのモスクワ」

そこで、私たちは子どもたちがロシア・モスクワについてより深く知ることができるようモスクワの歴史、文化、産業、人々の暮らし等について詳しく調べ、副読本「わたしたちのモスクワ」を作成（改訂）した。その中には社会科学見学や職場体験で訪れた場所についてまとめたものや、日本企業の方、ジャパンプラブの方にインタビューし、聞き取ったことをまとめたものも紹介しているので子どもたちにとっても身近なものとなっており、授業で広く活用している。また、中学部では「ロシアを語ろう」という取り組みを行っている。日本とロシア、修学旅行で訪れるドイツあるいは、これまで自分が駐在した国などを比較し、互いの国の良さを知り、日本との共生について考え、まとめたことを人形劇やパネル、プレゼンなどそれぞれが工夫しながら発表する。

(3) コミュニケーションツールとしての英語とロシア語

本校では国内のカリキュラムに加え、「英会話」と「ロシア語」の授業を行っている。習熟度によって「英会話」は2コース、「ロシア語」は3コースに分かれて授業を実施している。交流活動を重ねる中で児童生徒からは英語やロシア語で日本の文化を伝えたいという声も上がるなど、コミュニケーションツールとしての英語やロシア語の必要性を感じている様子であった。平成29年度は現地校との交流で、現地校の児童は日本語劇に取り組み、本校児童生徒はロシア語で日本の文化を紹介するなど交流活動も充実してきている。在外教育施設の特徴で年度途中で児童生徒が転出入をするので「英会話」と「ロシア語」のカリキュラムが確立できていないため、今後、カリキュラムの見直しや指導方法の工夫を重ねる必要がある。

(4) 現地校との交流

本校では小学部を低・中・高学年と3つのブロックに分け1471番校と、また中学部は1223番校と相互に学校訪問を行い、各ブロックとも年2回ずつ交流活動を行っている。交流活動ではお互いの国の文化・風俗・習慣などに親しむことを通して相互理解に努めている。日本人学校の児童生徒にとってはロシア文化を理解する前に、

基盤となる日本文化の理解を深めることこそ大きな意義があり、その理解なしに有意義な交流を行うことはできないと考えている。そのために「日本文化を紹介する」と「伝統遊びを教える」という活動は、現地校の児童生徒に日本の文化を知ってもらっただけでなく、本校の児童生徒が自国の文化を知るという意味で重要であった。子どもたちは英語やロシア語、あるいは日本語やジェスチャー等を駆使しながらコミュニケーションを取っていた。交流活動の最大の成果は、本校の児童生徒の中に「日本文化をしっかりと伝えたい」という気持ちが醸成できたことである。

【主な交流活動】

	現地校を訪問した時の活動	本校に現地校を招いた時の活動
1、2年生	マトリョーシカのぬり絵 「大きなかぶ」の日本語劇鑑賞	体づくり（縄跳び、ドッジボール） 折り紙体験（紙飛行機、手裏剣作り）
3、4年生	ロシア伝統舞踏体験 ロシア伝統服の説明、試着	豆まき体験 習字体験
5、6年生	レゴ教室 5年生の美術の授業に参加	ロシア語による日本文化の紹介 米についてプレゼン、おにぎり作り体験
中学部	日本語でロシア文化の紹介 ロシアの家庭料理「ブリヌイ」の調理 ロシアンティの入れ方、作法体験	音楽活動（器楽演奏、合唱） 書写、折り紙、伝統遊び体験 おにぎり作り体験



折り紙で手裏剣づくり



おにぎり作り体験の様子

ロシアの学校では、11時過ぎに朝食、13時過ぎに昼食と2回給食がある。平成29年度は小学部が1471番校の食堂でロシアの給食（朝食）を体験した。登校前に家で朝食を食べるので、メニューはパン、オムレツ、紅茶といった軽食であった。「家で朝食を食べてから13時の昼食までにお腹が空く」というのが給食が2回ある理由であった。

6. まとめとして

本校の児童生徒は本当に真面目で何事にも熱心に取り組む。今後は、日本の文化と異文化を比較する中で浮き彫りになった「違い」をテーマに現地校とディスカッションするような取り組みが必要だと考える。

交流内容が3F（Festival, Fashion, Food）で終わることなく、お互いの国がもつ文化や習慣等について議論し、共感的に受容する態度を身に着けることでより深く理解できるのではないかと考える。